

近世日本における三教一致論の泥濘

——熊沢蕃山による克服の試み——

森 和 也

一

排仏論と護法論との関係は近世仏教のみならず近世思想全般の性格を浮かび上がらせるものであると考え、関心を持ち続けてきた。対峙する排仏論と護法論が峻なす柄であるとすれば、地の部分には三教一致論が存在している。排仏論の有力な担い手である儒者は、古代・中世以来の三教一致論的言説——とりわけ神仏習合を批判するところから排仏論を立ち上げ、一方、護法論の側には三教一致論を援用して排仏論に抗弁する様式が見られる。また、転じて三教一致論は排耶論へも応用された¹⁾。

この三教一致論的思考法を分析することで、排仏論と護法論との関係を単純な対峙と捉える平面的な理解から、立体的な理解へと発展させることができるのではないかと考えている。

この問題意識に従い、三教一致論と排仏論との関係につい

て、まず、脱げ出すことの難しい《泥濘》とすら呼び得る近世日本における三教一致論の広範な受容について述べ、これを前提として次いでこの三教一致論の克服の試みを熊沢蕃山の言説に追ってみたいと思う。

二

三教一致論を支える思想的基盤には、古代以来の伝統仏教における本地垂迹説、新来の禅および禅から影響を受けた宋学以降の新儒学における心学という二つの大きな流れがあった。

このうち、近世日本の支配階級である武士階級と儒教・禅との親近性から、三教一致論への心学的な意味付けが近世には多く見られるようになる。むしろ本地垂迹説も近世に命脈を保つが、儒者あるいは国学者から激しく批判され、彼らの文脈での三教一致論を支える思想とはなり得なかった。

心学的三教一致論の例は多いが、まず、後に述べる熊沢蕃山の師であった中江藤樹の言説を見てもことから始めたい。藤樹は「翁問答」などで仏教批判を盛んに行い、三教一致論には批判的であったが、その早い晩年の正保四年（一六四七）に刊

行した女性向けの教訓書『鑑草』では、やや異なる姿を示している。藤樹は、三教それぞれが「明德を明らかにするをしへ」であって、『心』という領域において一致するとする心学的三教一致論の典型的言説を一応は受け入れ、そのうえで「世間通用」には「儒道の心学」がもつともふさわしいとして儒教の優位を説いている（『鑑草』巻之四「教子報」）。ただし、ここに引用した藤樹の「三教」は、同条中に「仙仏の二教はその法世間に便り悪く」の言葉から気づくように、中国から移入した儒仏道の三教である。承応四年（一六五五）成立の如備子齋藤親盛の仮名草子『百八町記』巻三にも、「しかれば仏儒道の三法は三法といへども、その本分の理はおなじ一枚の畳のごとく一致也」と述べる儒仏道三教の一致論が見られる。

中国の儒仏道三教一致論は長い伝統を有し、明代に盛行するが、それらの思想が記された漢籍を読みこなせる知識層、例えば正統派の朱子学者であった雨森芳洲の『橋臆茶話』巻上に「老子・釈迦・孔子」三聖人の形よりも上「形而上」を言ふや、謀らずして同じ。蓋し天の唯一の道理は二致無きが故なり。其の形より下「形而下」を言ふや、則ち差へり」と述べるような心学的三教一致論が見られるのは、むしろ日中の影響関係から

すれば自然なことであった。しかし、ここで注目すべきことは、通俗的な教訓書を受容する層にも心学的三教一致論という思想の枠組みが見られることである。

また教訓書としては対象を武士階級に向けていると思われる『心学五倫書』（著者不明。熊沢蕃山に仮託。慶安三年（一六五〇）刊）に、「日本神道は、我心を正しくして、万民を憐み慈悲をほどくすを極意とし、堯舜の道も極意とせり。唐にては儒道と云、日本にては神道と云。名は替りて心は一なり」とあるように、藤樹と如備子の同時代において神、儒仏の心学的な三教一致論が見られる。両者は並行して存在していた。³

神道と儒教とが民衆を教化し国を治めるという点において一致するのは、儒者による儒家神道の議論によく見られるところであるが、『心学五倫書』では、仏教もその点において一致するものとして説かれている。ここで様々に論じられている仏教の「心」については、後半で「心はなき物ぞと落居するなり」と述べて、仏教との根本的一致は否定されているが、その鍵となるのも、また『心』であった。

この三教関係を護法論に援用すれば浄土宗の大我『三辨訓』（宝暦八年（一七五八）序）に見える「三教、途を殊にすといへども、その帰、一なり。善を勧め悪を懲して、人心を正しくする所以なり」という三教一致論的護法論になる。

思想用語としての「心学」は朱子学に起源するが、現代の日本においては石門心学が「心学」の名を占有している感がある。

この石門心学も三教一致論を説く通俗道徳であった。

石門心学の祖石田梅岩の『都鄙問答』（元文四年（一七三九）刊）巻之三「性理問答ノ段」には、「神儒仏トモニ、悟ル心ハ一ナリ。何レノ法ニテ得ルトモ、皆我心ヲ得ルナリ」と見え、さらに、江戸後期の柴田鳩翁の『続々鳩翁道話』（天保九年（一八三八）刊）巻之下にも「おのおのその趣はちがふやうにござりますれども、所詮人を教へ善をすすめ、悪を懲すの外はござりませぬ。ここにいたつては、三教一致でござります」と述べられるように心学的三教一致論が継承されている。通俗倫理としての三教一致論的言説の根強さは、二宮尊徳の言説にもうかがうことができる。

尊徳の高弟の福住正兄が筆記した『二宮翁夜話』（明治十七年（一八八四）〜二十年・正編五巻刊）巻五に、「（神儒仏）此三道の正味のみを取れり、正味とは人界に切用なるを云、切用なるを取て、切用ならぬを捨て、人界無上の教を立つ、是を報徳教と云ふ、戯に名付けて、神儒仏正味一粒丸と云、其功能の広大なる事、挙て数ふべからず」という発言が見られるが、ただし、この尊徳の言説からは、採長補短的な三教観と、それを昇華させて一つの教えを生み出そうとしていることが読み取れるため、心学的という冠は不適當であり、別に機能的三教一致論とも呼ぶことができるだろう。

機能的三教一致論については、私が以前に提起した三教関係の三類型「多元型・排他型・包括型」のうち、包括型三教関係

との比較から得るものがあると予感させるが、今後の課題としたい。

三

先に挙げた『心学五倫書』は熊沢蕃山に仮託されていたが、この仮託については、蕃山自身が『集義外書』巻三で明快に否定している。仮託されるということは、蕃山ならば発言しそふであるということであるが、実際はどうであったのか。彼の三教一致論の議論は屈折しつつ、『三教各別論』と今かりに呼ぶ姿を示すことになる。

蕃山の女性向けの教訓書『女子訓』（元禄四年（一六九一）刊）巻下を見ると、「さとる時は生ながら仏也。釈迦は天竺ことば也。能仁とほんやくす。仁を能するは心の徳也。もろこしにて聖人賢人と徳の位によりて名付るがごとし」というような心学的三教一致論に沿った言説を見出すことが出来る。

『女子訓』全体としては仏教批判の文脈ではあるが、このような表現が見られるのは、心学的三教一致論の言説の根強さやうかがわせる。あるいは藤樹の『鑑草』における三教一致論的言説を女性向け教訓書であるためとする蕃山の評価（『集義外書』巻七）は、師の藤樹に自らの行為を投影して述べているのかもしれない。

この『女子訓』が蕃山の著述の中でもっとも三教一致論に接近した言説である。蕃山の著作は『大学或問』が著名であるが、

近世を通じて流布した蕃山の名著『集義和書』・『集義外書』の言説から、三教一致論から『三教各別論』への転換を跡づけてみたいと思う。

『集義和書』巻四では、葬喪の方式にふれて、「上代にも神儒仏まじへ用られ候故に、東照神君も、神儒仏三ながら用ゆとの給ひ候」と、現状追認のあたりで三教の葬喪の儀礼の並存を認めている。むろん、幕藩体制下で「東照神君」を公的に批判することは不可能なことである。ここで注目すべきことは、三教の一致ではなく、並存が述べられている点である。

三教の並存について『集義外書』巻十六「水土解」に、「儒法と云は跡なり。跡は其国にをいても、時うつるときは不レ行こと多し。況や日本にをひてをや。儒道神道仏道、みな明知の人の其時所位に応じて行ひし跡なり。道の真にはあらず」という核心的な記述が見られる。

ここでは時処位論に拠って、神儒仏は相対化されてしまっている。時処位論は、蕃山の思想を語るうえで避けることの出来ないものであるが、この時処位論は、「道」と「法」とを区別する道法論を根拠にしている。引用文中に見るように「儒道神道仏道」は「道の真」ではない「跡」であって、それは状況に応じて変えることのできる、いや、変えるべき「法」であった。

『集義外書』巻三では、「道と法とは別なるものにて候を、心得ちがひて、法を道と覚えたるあやまり多く候」と「道」と

「法」との区別の重要性を指摘する。

法は中国の聖人といへども代々に替り候。況日本へ移しては、行がたき事多く候。道は三綱五常これなり。天地人に配し五行に配す。いまだ徳の名なく、聖人の教なかりし時も、此道は既行はれたり。いまだ人生ぜざりし時も、天地に行はれ、いまだ天地わかれざりし時も、太虚に行はる。人絶天地無に帰すといへ共亡ることなし。況後世をや。法は聖人時処位に応じて、事の宜きを制作し給へり。故に其代にありては道に配す。時去り人位かはりぬれば、聖法といへども用ひがたきものあり。不レ合を行ふときは、却て道に害あり。今の学者の道とし行ふは、多は法なり。時処位の至善に叶はざれば、道にはあらず。(『集義外書』巻三)

「道」とは絶対的な真理であるが、「法」とは現実の所与の条件に相応した「道」の応用であった。心学的三教一致論が「道」という根元に遡れば三教は一致すると考えるのに対し、蕃山がとった方法は、神儒仏三教を「法」に配当することによって三教が「道」に短絡することを回避させることであった。

時処位論の根拠は道法論であったが、時処位論の具体的展開が水土論つまり風土論である。『集義外書』巻十六「水土解」では、「日本の水土によるの神道は、もろこしへも我国へも、かす事あたはず、かる事不レ能。唐土の水土によるの聖教も、又日本にかかる事不レ能、かすことあたはず。我国の人心によるの仏教も又しかり」と、神儒仏三教は日本、中国、インドとい

う地域と一体のものとして捉えられている。

水土論では《水土》という判断基準が優先されるため、「仏法には不仁なるところありといへども、易簡なる処ありて、日本の水土に相応せり」と仏教の存在を許容し、他方、「儒法は水土に応ぜず」と儒教が日本という風土に不適応な側面があるとする。蕃山は述べている。ただし、これには抜け道めいたものがあつた。蕃山は日本にふさわしいものとして神道を挙げているが、蕃山のいう《神道》は、三種の神器が象徴している知仁勇の三徳であり、儒教的に解釈し直されたものであつた。蕃山においては、「道」は《神道》という「法」によって日本の水土にふさわしいかたちで顕れていた。

蕃山の三教観は、「道」に遡上することによる三教の「一致」を回避する一方で、「法」によって三教の個別性を保証するものであつた。『集義和書』巻一では、「仏をそしめるは無用の事なり、たゞ己が明徳を明かにする事をせよ」という心学的三教一致論を退けて、三教が一致するのではなく、個別であることによる平和的共存を主張する。

一致にてもなきものを、一致と虚言可申様もなく候。其上、一致は争の端也。同じ仏道の中にてだに、各の異見を立て相争ひ候。別は別にしてあらそはざれば、いつまでも難なく候。(『集義和書』巻一)

蕃山は、三教の相克を職人の兄弟が職業によって矛盾するさまに喩え、「本の兄弟の親しみの見時は、職は各別にして、

争はあるまじく候」と、我見を立てて三教が主導権を争うことを批判している。これが三教一致を止揚した蕃山の《三教各別論》と今かりに呼ぶものである。また、『集義外書』卷十六「水土解」には、質問者に「博文の儒者にも三教一致と見侍る者あり。先生は各別なりとのたまへり」と言わせているので、蕃山自身も《三教各別論》の卓越性を自負していたと思われる。

ただし、蕃山の所説は良いことづくめではない。三教は随意に選べるものではなく、水土に規制される不自由さを持つていた。さらに、「道」と「法」とを分けたことで、普遍性よりも地域特殊性を重視し、水土論によって風土論的自国中心主義に絡めとられる可能性があつた。

心学的三教一致論の言説の生命力は根強く、万教帰一的な教説を持つ現代の新宗教教団もめざらしくはない。こうした思想的伝統にあつて、熊沢蕃山は、いわゆる《陽明学者》に分類されるが、表層的な見方では心学と親和的な立場であることが予想されるが、今回検討した資料からうかがえる蕃山の姿は、心学的三教一致論を回避しようとした思想家の姿であつた。

蕃山の水土論によって三教一致論を回避する言説は、増穂残口⁶⁾、穎齋主人⁷⁾など談義本の言説の中に受け継がれてゆく。他方で荻生徂徠・太宰春台などが説くところの儒教がピラミッドの頂点にあつて他の宗教がその下にあつてしかるべき役割を果たす包括型三教関係へと発展的に受け継がれることになる予想しているが、これは今後さらに検討を続けてゆく課題である。

- (1) 以心崇伝起草の「排吉利支丹文」に「日本は神国、仏国にして神を尊び仏を敬ひ、仁義の道を専らにし、善悪の法を匡す」とあるのが典型である。
 - (2) 山下龍二の評価（『中国思想と藤樹』日本思想大系二九『中江藤樹』岩波書店、一九七四年、四〇七頁）に従い、藤樹の仏教批判の抑制は陽明学の発展傾向に沿ったものとして本稿では考える。
 - (3) とともに宝暦七年（一七五七）刊行の洒落本『異素六帖』（沢田東江著）と『聖遊郭』（作者未詳）を比較すると、『異素六帖』が歌学者・儒者・仏者であるのに対し、『聖遊郭』は孔子・老子・釈迦で、異なった三教観が百年後にも共存していたことが分かる。
 - (4) 森和也「近世日本における神儒佛三教関係の再検討——その排他と共存の構造——」『蓮花寺佛教研究所紀要』第八号、蓮花寺佛教研究所、二〇一五年。
 - (5) シャカムニの漢訳「能仁」「能寂」あるいは「能仁寂黙」は、Sakya-muniのśakyaを「能」と解釈して漢訳したものである。
 - (6) 残口の所説が蕃山の焼き直しであるという批判は同時代の多田南嶺の『蓴菜草紙』巻之二に「大方は熊沢次郎八（蕃山の通称）が集義和書外書などより書拔て」とあるように早くからあった。
 - (7) 徂徠が蕃山を経世論の先人として意識していたことは、原念齋『先哲叢談』巻六に見える「徂徠毎に自ら言ふ、熊沢（蕃山）の智、伊藤（仁齋）の行、之に加ふるに我の学を以てすれば、則ち東海始めて一聖人を出す」という発言からもうかがえる。
- （もり・かずや、日本宗教思想史、中村元東方研究所専任研究員）